

2024年7月14日 青戸教会「湖上を歩く」

高橋克樹牧師

聖書 イザヤ書43章1～13節、ヨハネ福音書6章16～21節

ヨハネ福音書6章によると、主イエスは5000人への給食の奇跡を行った後、夕方に、群衆を解散させる一方で、弟子たちを舟に乗り込ませて、ガリラヤ湖の向こう岸であるカファルナウムに先に行かせようとします。イエスは、夜が明ける頃に、湖の上で逆風のために漕ぎ悩んでいた弟子たちを見て、湖の上を歩いて弟子たちに近づき、誰が自分たちに湖の上を歩いて近づいてきたのか弟子たちが怖がっていると、「わたしだ。恐れることはない」と言って、舟に乗り込みます。そうすると、間もなく舟は目的地であるカファルナウムに着いたという物語です。

この物語は、嵐の湖の上を歩くというモチーフと、逆風から弟子たちを救出するというモチーフが結びついていることから見ても、明らかに、初代教会のこの世的に困難な状況にある信徒たちの窮状を、イエスが困難な状況の中でも教会を守り導き、目的地まで無事に信仰者たちを送り届けるという信仰的な守護神であるイエスのことを表しているのです。ですから、主イエスは初代教会に集う信仰者たちに食べ物や奇跡的に与え、なおかつ、目的地まで無事に守り導くイエスを象徴的に描いているとみなして間違いはないと思います。

初期キリスト教はユダヤ教の一分派としてユダヤ教の枠組みの中で辛うじて生きていました。しかし、当時のユダヤ教は寛容的な宗教ではありませんでしたから、キリスト者は日常生活で排除されやすい状況にあったのです。日常生活で地域の人的なネットワークの支援が得られないならば、自分たちだけで団結して助け合うしかないわけですが、それがいかに困難な状況にあったか。ですから、教会は嵐の湖上で波に翻弄される小舟のような状況にあったと思われます。ここで主イエスは風を叱ったり、湖に対して「静まれ」と命じたりしていません。イエスが弟子たちの舟に乗り込むと、風は止んでしまっ、目的地にいつの間にか到着してしまっているのです。

旧約聖書では、神ヤハウエが嵐や海の支配者として描かれています。神的能力を持つ人間が水の上を歩くというモチーフがヘレニズム世界にもあるが、旧約聖書にも神が『海の高波を踏み砕かれる』（ヨブ記9章8節）と言う表現があるように、新約聖書の時代においても、イエスの湖上を歩くという世界観は格別不思議なことではなかったと思われる。ヨハネ福音書記者の関心事は、イエスが神的・超自然的存在であったということと、つまりはこの世的な困難な状況を打ち破る力を持っているということを表したかったと受け止めるべきなのです。

なぜ、このようにイエスが神的・超自然的存在であったかを描く必要があったのか。ヨハネ福音書の記事によると、5000人の供食の後、夕方になったので、弟子たちはガリラヤ湖畔に降りて行ったのです。そして舟に乗り、湖の向こう岸であるカファルナウムに行こうとしたのです。17節によると、『既に、暗くなっていた』のですが、イエスはそこにはいませんでした。しかも、舟に乗ったものの、強風に阻まれて、湖の上を暗闇の中で漂っていたのです。どれほど不安だったことでしょう。ガリラヤ湖は海面よりも200mも低いところにあるすり鉢状の湖です。周囲が山で囲まれていて、ときどき突風が吹き荒れます。いったん、突風が吹くと漁師であった弟子たちもお手上げになる湖です。わた

しも聖地旅行の際には大きな船に乗ってみましたが、子舟で突風に襲われたらさぞかし不安だろうと思ました。純福音派の牧師一行が突風に襲われた時、その牧師が慌てしまい、同行した信徒から「先生はなぜイエスのようにどっしりとしていられないのですか」とあきれられたという話を聞いたことがあります。ガリラヤ湖のことをよく知っている漁師であつても、突風に襲われるとお手上げなのですから、弟子たちの不安は相当なものだったと思われます。

今は、イスラエルへの聖地旅行にはガザ地区への無差別テロに間接的に加担するような気持になるので、行きたいとは思いません。イスラエルにとって観光収入が大きな国家予算の資源になっているからです。

昨日夕方、TBSで、マダガスカル島では鉱物のマイカの採掘で危険な児童労働がなされていることが放映されていきました。気候変動で農作物で生活を賄えなくなったために、子どもも含めて家族総出でマイカの採掘をするしか生活の手段がないというのです。10歳ぐらいの児童が鉱物のマイカを地面を掘って、10m以上も地下に入って採掘しているというのです。しかもその鉱物マイカは10キロで60円で業者にあく買いたたかれていますというのです。実際に化粧品会社が買うときは10キロで60万円だというのですから、世界から非難が集中しているというのです。このマイカは化粧品用にパウダー状にして光沢感を出すものになるのです。化粧品でキラキラ感を出すために使用されるのがマイカという鉱物です。そのほかには、スマートフォン画面や自動車の塗装にも使われるものです。

先週、中国の綿花の話をしました。私たちの日常生活に必要な製品を作るために、企業が原料を仕入れる際に、児童労働に関わった原料を排除する動きが世界的に広がっています。私たちみな自分の選択とその選択によって生じる影響を考える責任があるからです。私たちが使う日用品にも、世界の片隅で学校にも行くことができないで児童労働をしている子どもたちがいることを覚えなくてはならないでしょう。これは、初代キリスト教の教会が、周囲の社会の中で孤立しながらも、互いに支え合い生き延びた団結力とは逆の思考パターンが必要なことを表しています。外敵から自分たちの生活を守ることを、教会を象徴的に小舟と表したのとは逆の方向性から考えてみる必要です。私たちの日常生活は自給自足の生活ができない環境の中に置かれています。誰かが生産した物を購入して成り立っています。しかも、世界的なグローバル化の中で、原材料がどこから仕入れられるものかいちいちわかりません。けれども、何をかうかは個人個人が選択できます。

中国の綿花のように、タオルからシーツまで私たちの日常生活に欠かせない製品が中国のチベット自治区の強制労働から仕入れたものかどうかを判別することができません。そういう意味で、私たちは自分の生活の基盤が児童労働のような差別と搾取の上に成り立っているかどうかを、できうる限り知らなくてはならないといえます。そうでなければ世界のどこかの差別と搾取の上に自分の生活が成り立っているかもしれないという不安を払拭できません。このような不安を完全に払拭することはできないかもしれませんが、主イエスの弟子として、この不安に立ち向かうことができるように、日常生活の製品の中に、その不安を現実のものとしてしまうものがないように気をつけて生きていきたいと思うのです。